



門 十一
號 977
卷 2

形影夜話卷下

問患者或療すふ別に意或用也なきものありや

答

凡患者を療すふ別に難治病或治人と形むよま
治すなき病を難治ふなきものありふ心も無き病
先師恒小曰く療治一段もあと思ふより治を施す
初より深く進みたる跡へん戻りかゝるものと教らま
たりぬ何れを老練の人か言葉より元來醫理も疎なる
と知る輕症も重症もあるものあり夫れ如何かと
云ふに形體の事小疎きる逆も施治病誤あり譬へん云
く患者の形體の敵國の地理なり乃ち山川もは險易何
れ高低ありぬ一はれ地の定まる所あり然るに

昭和二十八年
十月二日
購求

其地も常に異なり何れ必敵に謀計を設るべきあり
 人身に四肢百骸も定りたる部位あり其自然の姿も
 何れ必病む所何れの候たるを固より望聞問切の四診の
 古より定りたるものあり先此所如此ありきも何れ
 今かく異なり何れやと疑を起し能其状を考へ次は病
 を得るに日數を始め多く患者の年齢をも尋ね其疑
 ふ外も苦惱するものなり細密に問盡し從つ
 脈を切し已ら不審する所と斟酌し彼所如此の物有
 きも今かくするはた何れ何れと我意
 小決定する所出来たる上より方を處するべきあり翁の
 少年の時先師西玄哲先生も向ひ癰疽の初發あれは

候ふも皆一點粟粒の如し此時如何しと輕重險易を見
 分つるしと問ひし先生唯何となく已ら頭上より壓せ
 らる採る是れ何れと云ふは冷く怖きの極めく大患に至
 るものなりと教へたまはる是取留めべきやとある言たま
 彼場數を強し人の言葉なり今に至りては毎時此言
 小感するものなり何れをね藥の偏味し各主功ありもの
 にも用ひまはる害哉招くことあり既に腹中へ入るに再
 び取去るべきものなり必しを暴卒おすと云ふれ又是
 を與ふ所見込に何れを他を願ひさるものなり假令に
 敵を破るも先陣を不伐し後陣を伐し勝を取ると何れ
 如く發熱發渴頭痛等諸症何れをそれら拘らる下劑を

與へて利を得諸症一時に平愈するの類あり何れ患者
の病苦の何れなり此所彼所悩まきたるとも醫者眼
に明く問ふべき所を問ひ盡し心も徹したるありて
藥試與ふるべきなり元より患者も傍人の醫事試み
さうとゆゑ種々無益の事試みはらぬものあり必し
其言も迷ふるものも然きとも盡く其言を棄てきめを
何れこれのま醫理も明きまは其まの内のめは心
徹すると有る可取事の分るなり其取るべき事
斗試取らば疑ふ所も參へ考へ治を施す如しす
時の有誤るもの少きものなり阿蘭もて頭痛を真假の二
症も分つ假頭痛とい他所も毒ありて其為小頭痛す

なり故も其毒ありて攻む時頭痛自ら愈むなり真頭
痛の毒頭脳中にありて此症の頭脳も就く單ふ其毒
攻むとき平愈するなり是上るも取らざる試取るの
所あり阿蘭人の治を為すは道なり又此も可笑譬
なまこと昔一人の大盗ありて下の小賊を多く持て
或日春雨連日止は殊も寂寞なり一時美味を欲せし
より下命し其の市某店に好き魚あり盗み來
たり小賊聞て誰彼行かば番守ありて盗み獲す皆
空しく歸るなり次一人の小賊も命し其
其跡も大盗他も向つて日彼ちを必盗み來るなり汝等
の不才も彼も彼も無程彼小賊大なる

鮮魚を提ち来きり大盗見く其小賊は向ひ彼店より
 所にあがり一 股引を云ひしを左なりと答へしより一 是を番
 守阿まで目指す魚の盗み得らまきあがり一 他亦る阿り
 股引は盗み取りしをれは賣拂ひ其價は以て買來まきりと
 たり醫の病を療するもの如く病源此所は阿りて却り
 彼所は在ること阿り是等意を用いたまきの一ツあり此他意は
 用ひき事種く有る四時の氣候土地の寒暖は従ひく
 異事あるものと知る嘗て白石先生の南島志は讀しに
 薩州人曰本州の者琉球國へ在番は三年お一度交代
 せざるあり其中ふい固より酒を飲事を忌惡もの
 を有る然るも其人彼地は在る内の善く泡盛酒を飲し十

數鐘は勸與ふまきし辭せず北へ歸るは大島とのふおま至ま
 と數鐘に堪はず本土はぬるも及んく喉お下すを能さる
 事初の如しとあると天地斯人哉生し一 方物各宜き所有
 事と相傳ふ昔外國人有るありて曰此國南海瘴霧乃
 中る在るに及る人必ず天死す因り此泡盛酒の製法は
 授けし其毒は避るべきありしを考ふる小江戸に
 ても極暑の時の焼酎の受能く寒冷の時の飲まざるもの
 ありこれを思へば暑中の表氣開き裏氣冷へ寒中の表氣
 閉る裏氣熱くを見えり其後伊勢白子神昌丸船頭光太夫
 と小者魯西亞國北邊へ漂流しし松前迄海を江戸へ召歸
 さまし時松前侯より護送の人数を加へらまし其醫官

米田元丹といふ男一日草堂へ醫話ふ来り種々物語り此序
 我松前より参著の類功効得る病者の少く硝黄の類もて
 効効得る病人の多しといひ其坐る津輕の醫官樋口道泉と
 いふ男も居合く津輕を去り大躰それと同じき操ありと
 いふ又余り門人日向高鍋の醫官福崎大順萩原立章等
 り物語ふ我郷高鍋邊より假初の外邪も漫りに柴胡湯
 子類を與きは忽裏症に變り易といふ尤初より温補
 温補の薬は少くさきは人誤ると多しとあり又植木屋
 といふ此木は是非枯さしといふもの寒尿を貯置るは
 土は和しく植む如此とある必枯さるとあり翁も箕
 輪の植木屋次兵衛といふ者大成椎木を植むを見し

此物効用多し其後行て見たる能植着る繁茂せり
 物皆如斯あれ治療者意を用ゆるべきなり右ふ
 説く焼酎参著硝黄柴胡の類も土地の寒暖氣候より
 て人の腸胃に入ると功効立る所違ひありあれ其土
 ふ在つる心を得たるなり又阿蘭説ふ形體不
 具の人と病より龜背龜胸と成る類の臟象の位置
 を偏倚とありとあり人の耳目ふと天稟大小は
 ありて内象此物も生得不具なること有りその
 説置たり然る今日施治の此所なりといふ心用ゆる
 事なる凡金瘡打撲折傷脱臼等より變り腫瘍と
 ありたり格別他の外發諸瘍盡く内毒あるより根

さるものありしはの故に内治の主にし外治の客たるを
決して外治而已のこともあらず此も心付ざる時人我誤る
る多し外科といふも心を内外の二科に用ひべき其最
なる所あり

問醫を業とするもの薬方多く知るは以てよりとする
事あるや 曰否薬方の所謂兵家軍器の如し此物ある

まは戦うにあつては薬方を知らざるまは病を治するに能はざる
は固より論ずべし然れども已に力に應せざる大成兵器を好
む如く醫力のめりて漫りに奇方異方好む偏は是
れ貪り集むる無益の甚しきなり奇方好む人の多くは醫
才鈍き輩と思はるるあり古へは弓長刀太刀斗籠軍は

せしむるあり其後鎗といふもの出ても又鉄炮といふ物出来
格別軍の功者となりたれと軍の勝敗小至るは大将の氣
量よるをて四方の奇なるは好事のなりきまはあはれと
奇方多く知りたる斗みて用ひる力をあき時は何の用も
立ず石火矢の小筒より強力の器なきは是るて軍の
なれぬと云ふはあらばは火術知らざる古小齊は
田單の火牛の策は工夫し大利を得しはものあり軍理は
知る其志所切なる人の知る奇計も出るものなる也場合
を知るは料理は塩梅は知らざる如し假令
料理の如何し可宜と問ふ魚菜等に形は能く切る酒
酢味噌醬油も調和し煮る生ぬるを用ひざる

りのこ成さる料理とある人ききありや只煮方塩梅とあり
 よて美も悪もなるものなり塩梅の何き時を食すの
 意も適さず又塩梅美きとて出づ場のだんを考勸
 ざる時腹合ふ應せず無興あると同事なり酔後すむ
 べき成坐付に供し坐付すむべき成酔後に供する時大
 に人意を損するものなり方獻立する療治の塩梅あり
 来客の人品を知り設たる執立する能と能執立するあり
 ず患者の病症所因數多の機會成るる療治あり能と
 人の療治は非ず醫成する人方成貪り好んより療治の
 塩梅成得るを第一とせし又薬の單方に功あり多味の
 功ありとて人肯尤仲景なるの方の多味ありは成りしと

皆奇効あり方とあるれと又多味あるとて悉く功あり
 あり何なるもの都て薬の調合の妙ありものなり多味
 合し一能成するものなり兵家少用ゆる火薬
 を焰硝硫黄灰を一味と分つて甚き物より五分
 量を正し調合する時とて猛烈なる物なるもの朱砂と
 て性烈なるもの少何らされとも水銀とより輕粉とありては
 其力甚きものなり是等を以て知る多味の多味の
 功あり製薬の製法の功あり香川氏の如く一概あり
 云ひあり又薬の大劑に功あり小劑に功ありとて
 何れ是亦是とて從ひあり薬の性力を量り病の輕
 重も從ひ施すとて病ありての雞を割くに牛力

成用ゆるの誤りありしは只方より古今より多味單
味此分ちる功あり方成撰に取し醫理を以て病症を推
—— 求め施治成宗とす——

問病名の如何 答曰其實の無きものあり已に寒
小傷らざるもの成傷寒と名つる食小傷らざるもの成食
傷と名つるの類あり名あり病あり何の病有く後
名の設きたるものなり祛きを其名目何の故と云ふ分
ちるあり素人の耳に馴き来りて成りたるもの也一通
は明らかされ患者の心成安んずるを以て只願くは
病名より病因を分ち條理を知り成肝要とす——
勿論五行家所説の病因大抵の無益のため此多きなり

此病の惡血より来り此病の壞液より因り——此患は粘液より
起るものと云ふ所は意成用ひ能是成察——早く其物成
祛き去り氣血の流行常に復して清潔なるやりに治を施
せり——此條理不立りて名を主張しりて多端ありて療
治のちるものなり成を漢醫のなす——もて病門を
多く分ち故後世の醫者は疑惑——療治の條理立す
く成誤り多し——已に男子の下疳淋病婦人の帶下皆
龍膽瀉肝湯を通用す尤其症の輕重は從ひ方を轉す
るに成と云ふ藥性の同一筋の物成主と云ふ——あれ等
此病同因あり其療法一條理なきと云ふなり古人は心あり人
は問ふ此所不至るなり成當世の醫家其

本源に暗く患者に對して自らも不決する事或痰を
 癩なり肝經の濕熱なりなど能採ふ説は患者の何
 の辨へなく此説を聞かんと心得く病狀託し治を受く
 なし如此き世の風俗なり其證は何處の場所より
 久年此漏瘡を氣腫と名け治し難き舌瘡を舌疽と
 名つてきたる患者意安んし落し着するの類なり又
 陰莖に發する瘡は如採瘡症より下疳と心得肛門に
 發する瘡は如採瘡症より痔と心得く治狀施し患
 者誤るる多し是等即病名を主とするより此誤
 りなかり醫者は是れ恥しめせず恬然として已て未熟は省
 みて命なりとあつた何の心もや又女疝と云ふ名本州

よて見出したり酸瘡といふ病名何の書あり見出したるを
 と自負する醫者も何れ是等博覧を誇りてよく治
 療に實用あり立す知らざる可濟事なり畢竟名の無益の
 めのなきと名るけまは俗物に對して事不決り故なり
 良工とあんと欲するもの偏に病因を推し求ふは
 要とするし其實の所を物ふたゞの古も今も何所乃
 國めても人間と云ふものは上天子より下萬民に至るまで
 男女の外別種あり然るに上下を分ち夫れ此位階は
 立又其人に名を命し四民の名目を定しその
 一人たるを同し一人なり但貴賤尊卑の名目分る
 ちなり然るも其人の性質に賢愚あり上より下

あれは指揮する人の其諸民の利鈍邪正を察し、悪人を去善人を擧ふこと、或第一の務とす。醫者もその如く名小拘つては病因は善惡輕重を察し、惡きものを除き重なりを或輕く志むるの要は專務とす。然るも前に云ふ如く、病名は或は患者小對して其氣を安んずると、或はつす氣滯とす。病治一經、不益のものは或は舊習なきは、今更改め、一通、一の如く、殊小在官の醫の是を知れ、不學の譏を得る事あり。心は是の一事を問其他醫の要猶有也。曰あるを總く患者を療するに其扱方に意は用也。及、翁少年の時、甲俊庵と

いふ老醫に、其人の曰都下にて醫の業、羽二重摩を木綿摩れ、と、意は用也。と、教へ、其項は年若く、是は聞過、老に從ひ多く、此病者、或療も及、是浮言、是は貴賤老少、其人の平生と性、稟は強弱と、或思量、其程に應ず、取扱を、置たり、凡老人小兒の痛苦は堪へ、忍事、或は、故小假令、外症、或は、膏藥を貼る、氣強きは、貼換の時、放ま、惱む、常は、心、内藥、も、如く辛に過、苦き、に、扱、は、

婦人強小多一與ふとも調合と服法とふ意哉用由なりとあり
 然る哉強く用ふとき害哉招く事のあるものなり又飲食に
 至るに強小意哉用ひ只消化一易き哉進むなり粘稠小
 して硬く堅鞭物に必ず害あり阿蘭よての消化を四段に
 説く既其説哉譯文するに曰九人飲食益有四化一曰
 初化俎砧宰割二曰火化烹煮熟爛三曰口化細嚼緩嚥
 四曰胃化蒸變傳送云腹中入るる腐熟せざる前に
 先三化するなりとあり如許すまの腸胃哉勞せしめて化す
 まるなるも又食生食冷大嚼急嚥則腸胃受傷と説く
 此等此理哉よく辨へ知るべき事なり假令いふと者まの
 風味よく煮過せば強くして風味不美と云ふ物の類は

腹中入て自然の温氣をばく脹まひろく強く
 なり消化もろくおまの生きたる所の津液は
 粘凝して體を養ふに利あり其甚く害ありものなり其
 他一切乾枯せしもの皆おれと同し如此るも急病者に
 はよく意哉細小用ひよく進むべきなり又盡く
 淡薄の物に宜く油膩の物の悪きとふものあり醫者
 のたまを斟酌し能く病者の虚實哉診察し實
 家より淡薄なる物哉與へ虚家より油膩なる物の進め其
 程能き哉宜くし譬へ鳥獸草木哉養ふも同し
 養ひるれ枯り死めず足らざるも亦同し只過不及
 たるに要しとあり又性油膩しして虚哉補ふと毒

成増との別ありあり假令鮪絡松魚の類の毒有るは故ふ
 冬日煮過し氷らす是性熱有毒なる故あり又雞
 卵鰻鱺の類の油膩のものなきは其油脂美薄し
 體を養ふに利あり如此の事は意欲用ひ審み病者
 小與あるは且醫家業とするもの一切の飲料食糧を
 其製法と調理の原と成常に知究むるべきなり甚は
 何の如く何の物あり作らるるを
 を知るべきを妄ふ人小對し禁好は沙汰する
 なるひさし已小味淋酒の常の酒より毒なりと心
 得熱酒の毒ありし冷酒の無毒と云ふ程なる方まで
 のなり細人情も古今あり好嗜物も變異あり昔し

は食せしむるものも今もさう嗜む又食物の調理の宜し
 従ふ猶藥の配劑は如し是亦古と今と異なる多し此故
 病も翁若年の時見さる症近時多く見當るは
 され彼古今人情變態動作食物の變ふより新病も發
 するものさうなり已小痘瘡黴毒古書ふるは後
 世盛に行はるるの類なり近頃新渡の瘍醫大全
 にも江蘇揚州府江甘議三邑婦女脚氣門とく別一
 症は擧げたり是康熙五十年間ものなりと云ふは及
 ぬ病なり此類の人情も古とは異なりて食物の變り
 氣滯常に多く血液不潔成生し流利失常より來るな
 るなり如きはるる醫の業を必然一定と決むる事甚

た獲ききりてんりありあも説る硝子と水晶と見ると
 筆も口も及び習熟ふあつされ其妙處は
 此故に一人も多病者を取扱ひ功を積る上な
 らる鍊熟するの申す幾と知まらぬやふより
 富貴貧賤の差別を託せられ患者あつた力の及ん
 ばと深切小療をふ如いなす數人成療する間は
 自然と言外の意味も生得の才不才相應に熟する
 めのとらんり富貴貧賤の天よる安排し何ものな
 まは私も成るり何れは然る小凡庸の人只富貴
 榮達に心迷ひ我職事志薄く生涯阿諛牟利のため
 に奔走し無益ふ心地成勞する徒り何れ如此類の逆を

士君子の齒牙に掛くるきお何れ九醫業を立人と
 欲する人の第一廉恥の心を失ふ其業の寸陰の間もを
 油断せし一人もを託せられ患者何れ我妻子の
 煩ふやに思ひ深く慮りて親切に治成施すし假令
 何れ採る貧賤の者あても高官富豪の人もを療治は
 同一やに心は必し志成二つもさつる幾重も治療
 の要成自得し條理の立たる治術成施んと希し
 翁の壯年の頃より此所に意成注ぎ勉勵せし故
 今に其事足りたりとあはねと若き時は比すれあ
 しは明らかふ成る所もあはねと此年月権門富
 貴の家へ出入する故利達成得るたあなりと賤む輩も何

乃一又妓家俳優の輩も招き来りて往く可なり也
 志操の立ぬ男と謗る族も何れも一しきと翁と決り頓着
 せず招けを至り託すれ療治す底心名利の為にする志
 あり病を權貴の人より病愈る後再び出入せし固よ
 り此意をれと年始暑寒等の無益なる事よは奔走せし
 目當とあるす一人なりとも病人多く取扱療治の機曾
 々自得せんと欲してたるは是れ父祖より受継ぎし家業
 ありたるたけ瑕をけす代に思澤哉蒙りし
 君なきはより何の時其刻の用に去んと思ふ斗ふたり
 醫者の恥の業の拙きと云りより外に恥する事なき
 中知事とあり又病用の外諸侯縉紳の門に入らせし

あり若其法方々の思遇重なりてはまは報す命二ツ持
 されり凡夫浅猿一は若し高貴の惠愛厚けき
 はまに迷ひて我君に二心残せんを深く恐れ
 慎むるなり又富貴の人と常に親しく交さるは是れ
 凡心より自ら諂の情も起らんと思ひ無用の事なり
 漫り出入せず此等の翁病家取扱の微意なり
 問子務む所已お如斯なるは漸々おし今其業成り
 たりや曰否醫の生涯の業より迎も上手名人も至
 らざるものと見ゆ已き上手と思つても下りなるの兆と
 志るなり是れ翁の懺悔物語なり聞し召しはるは
 あり云ひしごとく我身醫家も生きたは以て業を立せ

まこと一日の世へ處ふものなりこのとき身をもたれども
 生得不才の志あるのく醫者と云ふ程の醫者も成へざらん
 と自省の願ふせめく一病もては囊中乃物哉探るる事
 やうにありたると
 患も祖先の事分ちたりと思ひ
 何物も難治の症よりて人の難治する所をんと彼是慮り
 えりも微毒ほとせお多く然も難治よりて人の苦惱
 するものあり是をより療むる人の世の中におきと
 心付是哉治せんといふ目當とせめく此一病能療
 せんと思ふ念より少壯の時の此病お功者なりと云ふ人
 哉聞の必尋求め其人も從ひ方術を學ひ習ひ毎時是を
 其患者お施すお我意に適するやうに効をばらんとすし

迎ふ人力のいふは其必驗の妙處得らると思
 ひ少年の愚昧より神明お冥助をばらんと欲し菅廟
 より百日詣り一心に祈誓せしうと元より醫事を知り
 孩お及き理をなれと祈りし其驗あり只日夜此事
 心頭も忘まはざるや或夜の夢想に天靈蓋紅
 花等分り為末與ふまの奇功ありと云ふ一方を授けり
 一と阿まとも是も凡心より出する夢想をばら施し
 試みる寸効あり然るに我學ふ所の足らざる故も
 及しと覺悟を志し古今お醫書を見盡さん
 はと憤發し數百部の書哉涉獵せんと志し立たれども
 生来の情夫より精カも薄はれたるをいひせめて

は多く志す徴毒此方論をのりて讀盡んと意を決し
 家藏此書いふ及よひ他人の秘藏せし珍書なりと力
 のおよぶたもの備へ集め其論と方とを盡く抜萃し
 既に數百方其揖録し患者に逢毎に其方中を擇
 ひたり症小從ひ施し試しふ是を百發百中乃
 神妙なる方となく其後阿蘭醫方此諸書に涉り
 其諸方此中試同し施し試みるにさせるかためありし
 兎角其内に年々虚名然得く病客の日々月々に多し
 毎歳千人餘あり療治するうちに七八百の梅毒家なり
 如斯事にして四五十年の月日然強きは九此病
 を療せしむに數萬然以て數ふたり今年七十や

いふも及くともいふも百全の所をさるるは患者の
 不慎なるを俱し療治此拙なるを益難治と云ふ然知
 りたるまで少く若年のはよかしく変るとあり一病さ
 たり況や百病をや元來身此短才より此となればと醫
 不熟するを云ふるの至り難きものと病と思ふなり才量
 ある人の成るものを知りねる卒示して成るやつきは
 決り此道さるし物然容易あり成るものやうに
 等閑小免ゆ人の悲しむ罪さるし又此よ一の説話
 あり序さるる語るなり總く彼大洋を乗る船頭し
 上中下の三等ありといふ若し洋中難風に逢ふるは其
 下等の船頭の其面人色さく只恐懼し脚腰さす嗟き

悲しむるものあり物用の用もたす事あり中等の船頭の
此難風難逃と知るとは船を擲ち晏然として必死を
覚悟し坐して死す然と事り上等の船頭の初より一
言のてをも云ひ救ふ事起る心を碎きも然る一己も逃
まざるものあり至る所の船とせに覆没せると事り醫者
業を為さるものも此境地あり少く難病と云ふ時他へ
譲りて療治せず治し易き症の療して一日を渉り
口淡糊する醫者あり如此の生涯其業の上達するは
はるきものなりされ下等と云ふ事又早く難症と
知り其上より工夫せし轉方小心淡竭ざる醫者の難症
は救ひはるものなりされ中等と云ふ事其

等あるものの難治なりよりの病あり然るは患者の
息断へ脈も絶するまでハ是非小救人と意を潜め思然
焦し心力淡盡して治然施するものなり如此すまは百
ふつハ利をばるる救ひ早するものなり死ぬ
ものなり少く難症のなる事やうに事ありたきものなり
然る事と自ら上りたりと云ふ他醫者へも譲らず絶
命するまでハ藥を與へ外に醫者のなる事やうも心中
に了簡し安んじて療治するものなり我慢の甚し
きものも不遜とも不慈とも云ふ事尤可憎の志あり
一度も二度も辭退すといへども病家の信任甚し強
く託するものなり及るるたきもの上等船頭の意の如く

卷一
一六

手成盡しなきなり先年長州の藩中に才人の患者あり其時其藩醫栗山幸庵を招に應じしに患者の状を告ぐ幸庵聞て予めさし思ひ遣りたりは阿まはあそ老兄を招きたり自ら難治とあり一兄も治を託せんとするに禮ふ阿まは治を盡すに醫の道なり此後を屢々玉趾を勞まへり力成添へ難治の事たり此一言假初のやうなれと醫たる人の道を知りたる云葉なる一已を難治と知りて人よ託せざる實も非禮なりすすり關西よりは栗山幸庵と稱

せらまきし程の人物なり今の泉下の客となつたまきどもるに觸まるとは思ひ出して感を生ずると志んくありある世醫を初より病の輕重辨へすうめくと療治し已に難症に極り治盡すに至りて俄に巧言を以て辭退し無理も他へ譲り自ら長持して殺せりと人評せられ汚名蒙らんを成恐ま強て免る醫者も阿りめり穢しき心もての中々真の醫業は立ち難きなり阿まは初發に此症後々の難症とならんき成明め察し手成下さし一他に譲る格別の事あり及し蓋漢土の古の醫術を疾醫瘍醫の二科に分つ後世に至ると十三科或九科に分つにあらる阿蘭もては

醫哉内外二科に分ち外よりするもの眼科外科にては
 外科の任と為と聞ゆ其熟練の者へ許して内外諸科哉
 かね志むるものあり故に一家哉為して書を撰するの人
 は各二科の著述の多し和漢より右の如く専門を
 立多分脩りせぬものあり翁の瘍醫の家を生きた幼より
 此事を専一ふ心の多し本業の治術の数年勉強し
 阿蘭醫術哉精究するふ從ひ金瘡折傷等の外傷の
 餘瘍醫家の取扱ふ病患悉く皆内に根さす外は發
 すもの哉知まり是故に外症を療するふ毎に内藥を
 急與ふされりよるて輕き感冒の如く相識の間より
 折に觸るる内藥の與へるものありといふとある

君もも此事知ろし召し給ひ疾醫相兼よとの命を蒙
 りし如くは是の本業より何れも固く辭し奉りたり
 其意何れあれは傷寒温疫の類より産婦痘疹等全く
 疾醫の業に係るの書幼より讀まざるふは其讀書
 の上より随分明らめらるる採るまともあつるものあり
 す此故深く意を注ぐに雖ふ自ら諸人を療して其諸症
 哉も愈されは彼治療の機會風味塩梅も免えず所謂
 書哉以て馬哉御まの道理より恐らく人哉誤る事
 め何れんと思量より辭し奉りしなり況眼科口
 科の業は猶更の事なり醫者なれども已う熟せぬもの
 哉何れも引受療治すべき事あるは已に我瘍

醫ありて内外兼療するき症哉今時博覧の良工あり
 と呼りて疾醫家より鬼や角評論する哉聞くふ口尚
 乳臭實に兒童の言と不堪聞事多し我より彼をん
 ぶと許の如くあるまじき又彼より我をんもの同くわん
 自ら習熟せざる事哉ありて患者哉多く誤り且識者の
 ために笑ひまじきありあらん恥うさふ此類の病は皆辭
 げて下さぬ是翁の志を立しつたりたる端なき長
 物強ひたまふ燈の油の絶えりや影子の姿頼も
 見えざるの説話も是と共に止め

右數條を翁が常に時あはる兒孫及門弟子に語ら
 むとあはるむるなり終るに近時の衰朽して萬事

ふ懶く閑あまると親友と交けし互に妄語妄
 答し無事に日を消する哉以て樂とい偶我
 業哉慕ふ人來り問て何事と其より從ひ其
 力に應し答るゆへ意哉盡さるるものなり古
 語ふ所謂師の鐘の如しと大鳴小鳴其撞く人の
 力より由ふまじきあり自序ある速しとて此頃不意に
 閑哉得く無為の餘りはく我身の上を顧ふ
 經歷したる歳月とせふ精氣も衰へ今まで免え
 しるもの次第に忘まらぬなり行ぬ古に七十
 ふして致事と何れ物の用も立さる年あまはな
 らるしこれをも以て想へる老老せんや恐らくは

久しうなるを知らぬ若しかゝる時節ふらふ人又
此閑暇をゆるんと雖も一因く自問自答哉
たり筆を任せし書はら神なる此一書といふり
たゞもつり此彼老人へ變のつは記遠不記近といふ
所より出てる事のみしつて皆心ふ浮きたるを
を随意に書出せるまてなる此中より善きと惡
きとをおぼゆるなり必くみるま出して他人に見せ
志むるもとさうれ若身後に遺りありて讀者あ
らざるも多し其冗長は堪わぬ多し固より
書不盡言言不盡意といふ委し其意味のあつ
たつて殊ふ不學は翁をまはし迎へ漢文もを

書取るは幸ふ我 邦の業は以てを傳ふる
風俗も其平話のまは國字を以て書著し置る
の但我徒の子弟は不才の論をくまき讀むは
便して早く此意は會得せしめんと老波心はま
はさるる子孫門人の子弟に至り醫業を立んと
思ふ人ありて其の煩はき甚堪へ思ひ是を讀
むは目のあつたり翁は左右のあつたり直に説話を
聞くと同一なり能此書の意味は會通せば
少し志業の一助ふをたるとあつたりと眼鏡の力
を借し燈をわつけ其下ふして記し置るなり

能奉而行之、天亦必率之以躋於仁壽之域
矣、所謂予之為取、天之道為然也、我 鷓齋
先生、紹祖先之事、繼箕裘之業、從事仁
術、積德重光、夙唱西洋學於我
東方、提桴鼓、動海內、一鞭所揮、天下風
靡、遂譯定其書、以公天下、儼然為斯道
一大家也、今春齡可古稀矣、偶會市、陌
塵垢、侵犯襟袍、大有事于藥餌、小子茂質
輩、夙夜看侍、惴惴焉、懷淵冰之懼、而極

之夢、將垂結、而二豎之祟、忽遁窟、尔後身
益健、志益壯、而又著此書、天之所以假年
者、殆為此乎、頃竊命茂質、當任校訂、此
書也、蓋自少壯、至今、觸於事、驗於手、體
於身、得於心之確說、要之也、其意專在為
來問者、出之代舌、以省高年、應酬之勞
耳、固無意於示人、况公天下乎、然弟子
採之蘊奧、則業奏豹變之功、傳之臭味、各
術見革面之風水、冰藍青、以欣以續、其

勢不得不施之天下、豈特惠我輩乎、明月
夜光實為海內之珍矣、恭惟 先生之有
斯德、所以果有斯言也、已有斯言、則天
之眷之乎 先生、豈亦偶然乎、原之既往、
推之方來、爛然金玉之選、願當占年
長、共歲積、至萬斯年、不塞不崩矣、
享和壬戌臘月望日大槻 茂實 謹識



杉田伯元校正

文化七年庚午十一月刻成

墻東居藏版



